

① 木曾左馬頭、その日の装束には、赤地の錦の直垂に唐綾緘の鎧着て、

鍬形打つ 打ち付けている
たる甲の緒締め、いかものづくりの 大太刀はき、
堂々に見えるような
腰に挿し

② 石打ちの矢の、その日のいくさに射て少々残つたるを、
合戦
残つているの

特に頭上高く突き出るようにして
頭高に
形動
背負い
負ひなし、

③ 滋藤の弓持つて、聞こゆる木曾の鬼葦毛といふ馬の、きはめて
評判の高い
いうでとりわけ
太く
太う
ウ音便

の
たくましいに、黄覆輪の鞍置いてぞ 乗つたりける。
イ音便
乗つてい
た

④ 燈 ふんばり立ち上がり、大音声をあげて名のりけるは、
大音
名乗つ
たことには

⑤ 「昔は聞きけんものを、木曾の冠者、今は見るらん、
御前達は
御前達はここで
見ているだろう

⑥ 左馬頭兼伊予守、朝日の將軍源義仲ぞや。
だぞ

⑦ 甲斐の一条次郎とこそ聞け。⑧ 互ひによいかたきぞ。
お前は
聞く
互い
敵

⑨ 義仲討つて兵衛佐に見せよや。」とて、をめいて 駆く。
討つ
頼朝
見せろ
言つ
大声を上げ
馬に乗つて走り回る

⑩ 一条次郎、「ただ今名のるは大將軍ぞ。
は
の

⑪ あます な者ども、もらすな若党、討てや。」とて、
取り逃す
討ち残す
よ
言つ

⑫ 大勢の中に取りこめて、我討つ取らんとぞ進みける。
義仲を
取り囲ん
で
討ち取る
う
進んだそう
だ

⑬ 木曾三百余騎、六千余騎が中を、縦様・横様・蜘蛛手・十文字に
が
一条の

駆け割つて、後ろへつと出でたれば、
一条軍の
さつと
副詞
出た
ところ

木曾軍は
五十騎ばかりになりけり。
なつ
た
そう
だ

⑭ そこを破つて行くほどに、土肥次郎実平二千余騎でささへたり。
木曾軍が
破つ
うち
が
防ぎ止め
ている

⑮ それをも破つて行くほどに、あそこでは四、五百騎、ここでは
土肥次郎実平の二千余騎
破つ
うち

二、三百騎、百四、五十騎、百騎ばかりが中を、駆け割り駆け割り
駆け抜け
駆け抜け

行くほどに、主従五騎にぞなりける。
うち
なつ
てしまつ
た
ける

⑯ 五騎がうちまで巴は討たれざりけり。
の
なかつ
た

⑰ 木曾殿、「おのれはどうとう、女なれば、いづちへも行け。
は
おまえ
早く早く
である
ので
どこ
でも
行け
副詞

⑱ 我は討ち死にせんと思ふなり。
し
よう
思う
のだ

⑲ もし人手にかからば自害をせんずれば、
敵の手
かかったとし
たら
する
つもり
なので
木曾殿の最後の

いくさに、女を具せられたりけりなど言はれんことも、
連れ
ていらつしやつ
た
など
世間で
言わ
れる
よう
な

しかるべからず。」とのたまひけれども、
ふさわしく
ない
おつしやつ
た
けれども

巴は
なほ 逃逃げ落ちて 行なかつかざり けるが、あまりに言いわはれたてまつりて、
謙讓 作者↓義仲

「あつばれ、よからうかたきがな。
あは 相あ手にするのにに 助動詞 申し上げ 言いつ

最後のいくさして見せ たてまつらん。」とて、
を 助動詞 申し上げ 言いつ

馬を止めて待機している
・控へ たるところに、武蔵の国に聞きこえ たる大力、
の

御田八郎師重、三十騎ばかりで出いで来きたり。
が 出いて来きた

・巴、その中へ駆け入り、御田八郎に押おし並ならべて、むずと取とつて
は 無理に並ならんで 御田師重に

引き落とし、わが乗のりつ たる鞍くらの前輪ぜんりんに押おしつけて、
自分 乗のりつ 御田師重を

少しも 動かさ 御田師重の
ちつとも はたらかさず、首 ねぢ切きつて捨すて てんげり。
副詞 御田師重の

・そののち、物具脱だぎ捨すて、東国の方へ落おち ぞ行く。
を 逃にげて

・手塚太郎討うち死しにす。手塚別当落おち けり。
は 逃にげ延のび てしまつた